

資料紹介

河合博之駐ポーランド特命全権公使の改宗と客死（1933年）
— 『無原罪の聖母の騎士』誌より—

加藤久子

はじめに

フランシスコ・ザビエルの日本到来以降、宣教師の日記や手記は、日本の政治文化（統治のしくみ）や社会、学問、文化、民俗を現在に伝える貴重な資料となってきた。幕末～明治期以降、諸外国との往来が活発化するにつれ、外交官や軍人、教師やジャーナリストなど、記録の書き手は多様化し、宣教師の書き残した記録は「日本」を理解するための資料としては副次的なものとなった。しかし、文化接触の歴史、または交流史の文脈において、今なお、新たな視点や情報（歴史的な事実）を獲得するための資料となり得る。

本稿では、1930～36年に断続的に長崎に居住したマキシミアノ・コルベというカトリック司祭が編纂した月刊誌『無原罪の聖母の騎士』より、戦間期欧州に駐在した一人の日本人外交官のカトリックへの改宗と死にまつわる記事を紹介する。コルベ神父については、カトリックの聖人として全世界において崇敬の対象となっているが¹、本稿で取り上げるのは、日本で宣教を行った1930～36年の時期である。分析対象としたのが1点の出版物であり、また期間も限定的であることから、おのずと限界はあるが、雑誌の内容を紹介しつつ、（1）日本滞りがコルベ神父にもたらした内的変化、（2）第二次世界大戦開戦前夜の日本人外交官のキリスト教への改宗といった2つの視点から、今後の研究の展開の可能性について示唆したい。

1. コルベ神父と『無原罪の聖母の騎士』誌

ライムント・コルベは1894年、ポーランドの儉しく敬虔な職工の家庭に生を受けた。コンベンツァル聖フランシスコ修道会の神学校に学び、同修道会に志願。マキシミアノという修道名を授かり、司祭となる。コルベ神父は、博士号取得のためローマに留学中、フリーメイソンの示威行動に衝撃を受け、無信仰者や反カトリック主義者を回心させることに並々ならぬ熱意を抱くようになった。1917年に「無原罪の聖母の騎士会」（信心会）を立ち上げ、ポーランドに帰国後、出版による宣教を思い立ち、『無原罪の聖母の騎士』誌の発行を開始した。雑誌は20年かけて、100万部を超える月刊誌へと発展を遂げ、ポーランドの農村や貧しい労働者の間にも定着をみた（当時、小教区教会や各家庭、職場でのいわゆる「回し読み」や「読み聞かせ」が一般的であったことを考えれば、その影響力は出版部数の数倍と考えられる）。

このような中、コルベ神父はかねてから構想していたアジア宣教の計画を具体化すべく、1930年4月に長崎に到着した。早速5月15日付にて日本語版『無原罪の聖母の騎士』第1号が発刊されている。内容は年を追って変遷が見られるが、1930年に出版された7号分では、①コルベ神父による講話（特に聖母マリアについて）、②読み物（聖人伝、ルルドの奇蹟の紹介）、③信徒の投稿（ポーランド語版からの転載）が中心である。

これが翌 1931 年になると、①が減少し、④世界各国におけるカトリックへの改宗者に関する記事が毎号のように掲載されるようになる（1931 年 1 月号「ニューヨークに於て高名なる牧師の歸正」、「プロテスタント信者社會の首領歸正して公教司祭と成る」、2 月号「カトリック教會への改宗に關して」、3 月号「ビルマニアに於ける衆團的改宗」、「ロルツイング牧師の活動」、「英國教會の宣教師の歸正」、「何故かくも多くの英國の作家がカトリック教會に歸正するか」等。歸正とは、キリスト教の他の教派からカトリックに改宗することを指す）。また、同年 4 月号では、3 月 7 日に長崎の「無原罪の聖母の騎士修道院」が初の日本人修道士を迎え入れたことが報じられ、この年の後半より、日本人の書き手による記事が増加し、連載も複数始まっている。

記事の主題が短期間で変転しているのは、コルベ神父が欧州やインド等への出張により、不在となる期間が少なくなかったのが一因であろうが、会と雑誌の日本への浸透や、コルベ神父の内面に一定の変化があった影響とも考えられる。3 年目にあたる 1932 年までは、雑誌に日本に関する記述、または日本人との対話というものがほとんど登場せず、稀に記述があったとしても、日本の街頭にマリア像がないことへの嘆き（1930 年 6 月号）や、以下のような、対話の形式を取りつつも実質的にはコルベ神父の講話と言えるものである（「我は無に歸するを欲せず」1930 年 6 月号）。

それは五月の半ばでした。私は用向きのため大阪へ旅行をしました。汽車の中で一人の青年と會ひました。彼は妻を娶るべく東京より故郷へ歸る所だつたのです。

「あなたはどんな宗教を御守りですか。」

「神道を守つて居ます。」

「そしてあなたは何んな目的で生活してゐなされるんですか。」

「……」彼は其目的をはつきり答へることは出来ないで、困つている様子でしたから私は續いて尋ねました。

「死後私等は無に歸するんでせうか、或は何か残る所があるんでせうか。」

「勿論何も残りはしませんよ、私信仰は有ちません。」

「今信仰問題をしばらく置き只だ道理だけで考へて見たならばどうでせう。幸福を欲するのは人間の性質です、誰でも幸福を欲しないものはありません。この性質から推せば人の目的は幸福でなければならぬ。又實際誰でも夫れを目的としてゐるぢやありませんまいか。」

「左様！實際ですネ」

「あなた自身は如何です？幸福でありたいと思ひぢやありませんか」

「それも出來得る限り長く幸福でありたいとお望みでせう。」

「勿論左様です。」

「そして實際の所死んでからでも何にも無いものに……虚無になりたいですか、或いは何かとなつてゝも残りたいと思ひませんか。」

「私虚無になりたくはないですナ」（以下略）

さて、このような中、4 年目にあたる 1933 年頃より、日本の宗教や日本人の靈性について踏み込んだ記述がみられるようになる。同年 2 月号に「誰が全世界の秩序を考へた乎」と

して、長崎近在の仏教寺院（宗派、寺院・僧侶の名など不明）を訪ね、僧侶と「アミダ仏は被造物ですか？」「否え、造られた物ではありません」「では始めも無いんですか？」「左様！終り無く永遠です」「ぢやあ全世界はアミダ仏に依って創造られたんでせうか？」「否え！全世界は造られた物では無いのですから、勿論始めはありません」というような問答を行ったと記している。コルベ神父は言下にこれに論駁しなかったものの、誌上では、「即ち学問上に於ける眞理が唯一だから、眞の宗教も唯一であらねばならぬ」とし、「しかして、眞の神とは全世界の創造主、即ち天主を指して言ふに外ならぬ」と結論づけている。

1934年9月号に掲載された精霊流しに関する記事は少し様相を異にする。コルベ神父は、異国情緒あふれる光景に大いに感興を催したようで、道行く人に、精霊舟や祖先の靈魂について尋ね、以下のような感懐を漏らしている。

思ひ浮かべると其れは實に綺麗な祭でありました。所謂人は死んでも大丈夫だ。何處かに幸福は見つけ出されるのだから即ち死んだ兩親に對して子供が行ふこの盆祭といふ立派な行事に依つてこの上もない美しい愛が施こされ又死せる兩親はこの盆祭といふ年一度の式にはるばる家族を訪れて自分の愛を子供等に分つ、何と麗はしい盆祭よ」と信じ切つている居る世人の多くに果して如何ばかりの「愛」といふ幸福が齎らされてゐるのでせうかの果たして如何ばかりの愛が彼等の死せる兩親に送られて居るでせうか？

ここでも、最終的には、「煉獄に止まつてゐるかも知れない彼等の靈魂を一日も早く天國へ入らせるためには如何にすればよいでせうか。それこそ眞心より進む私共の祈りこそ死せる靈魂と天主様とを近づけるものではありませんか、天主様に祈ることこそ祖先に對し又兩親に對してより大なる愛、此世に於いて故人に對してより立派な供ひはないと私は確信致します」と、カトリシズムの文脈において結論づけてはいるが、一定の共感を示している。

ただし、これは、コルベ神父が日本の風土や靈魂觀に親和的になってきたというより、精霊流しを、ポーランドのカトリック教会の行事（民間信仰と融合したもの）や民俗的靈魂觀と重ね合わせて理解した可能性が考えられる。ポーランドには、11月2日の「死者の日(zaduszki)」にあわせ墓参し、墓地に花などとともに蠟燭をともした色鮮やかなランプを飾る風習がある。「死者の日」そのものは、998年にクリュニー修道院で始められたカトリックの習慣であるが、ポーランドでは、それ以前から存在した10月31日～11月1日にかけて父祖の霊が家に戻ってくるという民間信仰に基づき、墓地に蠟燭をともすことで靈魂を「あたため」て呼び覚まし、家までの十字路に松明を灯して道案内をする風習があったとされる。戦前のポーランドの農村では、「死者の日」の前日には、死者のための食事やウォッカを用意し、夜通し家のドアを少し開けたままにし、タオルや水、石鹸を用意した。用意すべき食事のメニューや「靈魂が嫌う行為」とみなされた細々とした禁忌も言い伝えられ、前夜から当日にかけてそれが守られた。コルベ神父が、道行く人から聞いたとされる「死んで居た祖先の靈魂が自分の家族を訪問して最後の十五日の晩には又極樂に歸る」との説明は、カトリックの教義には合わないにせよ、ポーランド人にとって決して理解しがたいものではなかったに相違ない。だからこそ、精霊流しから、11月2日の「死者の日」を連想し、煉獄に止まっている家族の靈魂のために祈るカトリック教会の慣習と結びつけて説明したものと考えられる。

さて、この時期、コルベ神父は、一時帰国中のワルシャワにおいて、一人の日本人外交官と知り合い、同氏の改宗について『無原罪の聖母の騎士』誌に長文をしたためている。1933年12月号に掲載された、「聖母の小さき花：ポーランド駐劄日本帝國公使河合博之氏受洗」と題する記事がそれである。

2. 河合博之駐ポーランド特命全權公使の葬儀と墓

ワルシャワ市北西部のポヴォンスキ (Powązki) 地区には、各教派の墓地が集中しており、墓地の代名詞となる地名である。特に、カトリックのワルシャワ大司教区が管理するスタレ・ポヴォンスキ (古ポヴォンスキの意) 墓地は、18世紀末に造営が始まって以来、増築を重ね、現在では43haに及ぶ広大な面積を有し、しばしばヴァチカン市国の面積 (44ha) に匹敵するとの喩えが用いられる。



河合博之公使の墓 (ポヴォンスキ墓地) ²

独逸露三国分割期のコシチュシコの反乱

(1794年) から第二次世界大戦中のワルシャワ蜂起 (1944年) に至るまで、多くの戦死者が葬られてきたほか、ショパンの両親、作曲家のカルウォヴィチやヴェニャフスキ、近年では映画監督のケシロフスキなど、著名人の墓も少なくない (もともと、20世紀以降は、戦死者も著名人も、スタレ・ポヴォンスキのさらに北西に造営された公営のポヴォンスキ軍用墓地に葬られるケースが圧倒的に多い)。

そのスタレ・ポヴォンスキ墓地の一角に、河合博之公使の墓がある。パウシュルトコフスカによれば、河合公使の外交官としての経歴は以下のようなものである。

河合博之 (1883-1933) は1920年代にポーランドに駐在した前任者の多くと同様、東京帝国大学法科大学の出身であった。外交官としてのキャリアは1908年に始まり、1921年までフランスに駐在し、リヨン領事、在パリ日本大使館のアタッシュおよび一等書記官などを務める。次いでスイス、ソ連に駐在。帰朝後、条約局第三課長となる。1923年から在ベルギー大使館参事官、1926年から31年まで再びパリ勤務となる。同年7月ワルシャワに赴任。8月1日に信任状をポーランド大統領に手交している³。

さて、ポーランド在勤中の河合公使の、旺盛な仕事ぶりについては、外交文書から推しはかることができるが、パウシュルトコフスカの記述は、早々に公使の葬儀へと移っている。

河合公使は在任中の1933年8月15日未明、この年の4月から静養していたオトフォツクのサナトリウムで亡くなった。死因は1932年の晩秋、国際連盟会議からの帰途に感染した感冒による合併症であった。8月17日に行われた葬儀は、当時ピェラツキ通り10番地にあった日本公使館を出発した葬送行進で始まった。軍楽隊を伴ったポーラ

ンド軍が葬列を先導し、大統領、首相、外務省からの花輪を携えた代表団がこれに続いた。そのあとを、死後に贈られた大ポーランド勲章を飾った公使の棺が運ばれていく。棺に続いて未亡人と子女、木下代理公使はじめ日本公使館の職員たち、さらにポーランド政府および民間人、軍の代表、ローマ教皇大使を始めとする各国外交団、ポーランド・日本協会、東洋研究所、日本愛好学会の代表が更新した。イエンジェイエヴィチ首相も参列した礼拝式は、聖十字架教会にてガル大司教により厳かにとり行われた⁴。

『無原罪の聖母の騎士』1933年12月号に掲載された葬儀の写真を下記に掲げる（右上の写真が、ショパンの心臓が納められていることで有名な聖十字架教会）。

河合公使がカトリック墓地に葬られている以上、カトリック信者であったことには間違いないであろうが、では、公使はいかなる経緯でカトリック信者になったのだろうか。

3. 河合公使の改宗

『無原罪の聖母の騎士』において、河合公使の死に関する記述は以下の4か所にみられる。

① 1933年12月号、354～363頁

「聖母の小さき花：ポーランド駐箚日本帝國公使河合博之氏の受洗」コルベ神父著

② 1933年12月号、371～373頁

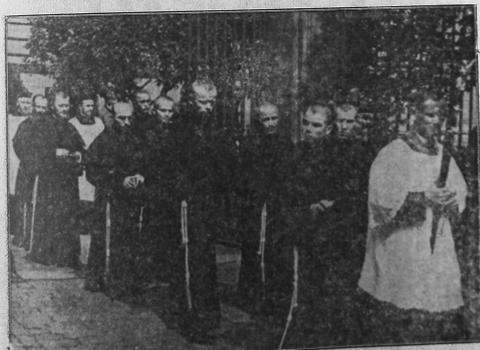
「河合公使夫人の無原罪の園訪問」コルベ神父著



公使の棺、儀仗隊、車隊、儀仗隊、音次、の兵、河合公使の受洗、賞を捧げる、進退する。



葬列、天主堂に着く。



十字架の次に、無原罪の園の修道士、ついでに神父、その後、棺、河合氏家。



天主堂を出て、墓地向左、河合夫人、同令、平田書記官。



司馬馬使教れる率を葬に墓
教大デマル使節皇るさ引列て地



式 葬 祈 の 所 墓

③ 1934年1月号、16頁

「故波蘭公使河合氏御夫人始め、……」

④ 1934年3月号、92～93頁

「前ポーランド駐在河合公使の葬儀」

結論を先取りして言えば、①の記事により、河合公使の改宗については、臨終に際しての洗礼であったこと、また、公使夫人がもとよりカトリック信者であったことが明らかとなる。

河合公使の死の半月前にあたる1933年8月1日、4月より会議のためポーランドに帰国中であったコルベ神父は、カトリック信者である河合夫人と面識を得たいと考え、公使館訪問に際し、無原罪の聖母の像を持参し、これを夫人に贈呈したと説明されている。

夫人は贈り物を喜び、数日後、ワルシャワのコンベンツァル聖フランシスコ会の修院長とコルベ神父を別荘に招いた。コルベ神父は、河合公使が「肺を患つて」病床にあることは、この時に初めて聞かされたと記されている。数日

後、コルベ神父は公使を見舞いたい旨申し出て、夫人と夫人の母君とともに公使が療養するサナトリウムを訪問している。車中、夫人から、公使が重態であることを告げられたとし、初対面の公使の様子を「生た人とは思へない程、お顔、お手先など枯木の様にやせ細つてゐられた」と描写している。

然し、その日は御気分が大變宜しかつた様で、私と會話を喜んで下さつた。四方山の話の末、宗教へ自然話に移つた。公使は言れる。「仏蘭西にゐたとき、ル、ドに聖母御出現以來、奇蹟が絶えない話も聞いてゐた、そして、自分自身もその夥しい巡禮者に交つて、實際にル、ドの聖地を踏み、奇蹟も見たり、聞いたりして、その強い宗教的雰囲気包まれて來たが、しかし、それによつて信仰に這入らうと云う發心は起らなかつた、また、フランスで「イエズスキリスト」と云う表題の佛語の書物を貰つて讀んだ、そしてその本で、眞のキリスト教はカトリック教だと云う認識を深めたけれども、更に之によつてカトリックに入門しようと云ふやうな、はつきりした轉心は起らなかつた」。さう云つて、公使は次々に御自身の宗教觀を漏らされる。私が眞理の一なる所以を説明すると、さうだとうなづかれる。それで、宗教も亦、種々の教義を信ずる爲には一であらねばならぬ、また天主も一でなければならぬ等々の私の神學上の理論も、この智識階級の人によく解つて下さつた。三位一体に就ては、支那の教で、キリスト教とは異つた意味のものであるが三位一体説を教へられてゐたから、その觀念から容易に理解ができる。斯う云うかなりつき込んだ問題にふれる前、公使は、多くの色々な異なつた宗教があるが、皆それぞれに一樣に眞理を持つてゐるのではないかと言はれたが、私はそれを

否定しなかつた。

「真理の一なる所以」について得心しつつ、「多くの色々な異なつた宗教があるが、皆それぞれに一樣に真理を持つてゐるのではないか」と応じた河合公使の発言は、宗教多元主義の考え方に近いものと考えられる。しかし、コルベ神父は公使の発言を取上げて否定せず、夫人に「不思議のメダイ」（聖母マリアを描いたメダル）を託け、そのまま席を辞している。8月14日、公使危篤の知らせを受け、神父は医師、公使館職員らとともに病床に駆け付けた。

今は一刻の猶豫もない私の爲には大切な時間だ、私は直にかねて公使が親友として深交があつたポ國在各國外交官主席、教皇使節マルマヂー大司教にその旨電話でお知らせして、御來臨を乞うた。使節は宙をとばして自動車でかけつけられ、それから一時間の後には早くも病室にあつた。使節大司教に最後のお勧めをして戴くことは、私が前からきめてゐたことであつた。

折角お近づきになつたばかりの、またこの後も私に親しくしていただけるものと楽しみにしてゐた、このよき公使に今お別れしなければならぬのは、私には大きな悲みであつた。また、それと同じく大きな歎きは、誠の宗教に這入れず、そのまゝ逝かれるのではないかと云ふことであつた。私はひたぶるに聖靈の光を祈りながら、使節の來着を待つてゐた。使節は、別室で私から公使と私との今までの交渉、私が差上げたメダイを公使が好感をもつて受けられたことなど聴きとられて病室へ這入られた、使節は公使の日頃の高潔な人格該博な智識に敬服してゐられ、公使とは殊に親しくしてゐられた、この友情を通じて、又友人として最もよき言葉をかけられるのである。力強く救世主を物語り、來世を説かれ、信仰に入るの定義を諄々と教えて行かれた、その間、病床に侍べるもの、夫人を始め使節秘書、私それに信者でなかつたが御母堂この四人は心を籠めて祈つた。人類の元后なる聖母は河合公使のよき靈魂を召された。やがて公使は口を開かれると使節閣下に洗禮を乞はれたのだ。公使はフランシスコの靈名を望まれた、使節大司教の手によつて「父と子と聖靈の御名によつて汝フランシスコを洗ふ」との言葉がかけられ、聖水は頭に注がれた。受洗後公使は大きな心の喜びを受けられた。その喜びの色は顔から容易に察せられた。この深い大いなる喜び？平和は、眞の道に這入つたものでなければ味へないものであらう。この喜び、この平和こそ、天主のお恵みを得た證據ではないだらうか、且つ眞の宗教に這入つた證明にはならないだらうか。公使はそれから數時間のあいだ、地上に在つて、實に平和な喜びに浸つてゐられた。そして私たち病床を繞る人々に、何故もつと早くこの教に這入らうとしなかつたのだらう、この喜びを知らなかつたのだらうとくり返しくり返し言つてゐられた。かくてその日の夕方、即ち聖母被昇天の前日この平和な、そして清らかな靈魂は、聖母の御手に抱かれて地上をさつた。

なお、この後、コルベ神父は公使館に日參してカトリックの教を説き、9月7日には夫人の母君と日本から随伴していた家政婦の1人が教皇使節によって洗禮を授けられている。また、翌8日には、既に洗禮を受けていた2人の遺児（10歳と6歳の令嬢）が、使節大司教より初聖体に与っている。



河合公使遺影と遺族の教皇謁見の記事

なお③として挙げた1934年1月号の記事によれば、河合公使の遺族一行は、日本への帰国の途次、ヴァチカンに立ち寄り、教皇に謁見した。正装の河合公使の遺影とともに、教皇より、公使への哀悼と遺族への慰めの言葉があった旨報じられた。

4. 日本人外交官のキリスト教への改宗

この後、『無原罪の聖母の騎士』誌では、立て続けに外交官（夫人・子女）の改宗について取り上げられる。『無原罪の聖母の騎士』誌は、カトリックへの改宗のニュースを継続的に取り上げていたが、この時期、特に外交官の改宗について立て続けに報じられたのは、河合公使の改宗を受けてのものであることは、以下のとおり明らかである。

⑤第46号（1934年3月1日付）81～82頁

「佐藤駐佛大使の令嬢受洗」

⑥第51号（1934年8月1日付）272頁

「スイス公使館の川村書記官歸正、夫人の熱心な祈の効」

⑤の記事では、本文の文脈とは関係なく、末尾に「又別項記載の如く去る17日東京麻布教會で葬式ミサを挙げた故ポーランド公使河合博之氏も臨終の病床に在つて洗禮を受けたことも讀者の知悉さるゝ通りである」と付言されている。記事内には、洗禮を受けた佐藤大使の令嬢（24歳、19歳）は東京の聖心学院に9年間学んだとの記載があるほか、サンパウロ総領事の令嬢（9歳）の受洗についても触れられており、総領事はワルシャワ在勤時に、後に教皇ピオ11世となるラッティ駐ポーランド大使と面識があったと説明されている。

⑥の川村書記官については、夫人が17歳の時に洗禮を受け、5人の子女にも洗禮を受けさせており、「夫君の歸正を日頃熱心に祈願してゐた」ことから、受洗に至ったとの説明がなされている。

以上の①～⑥の記事だけでは、何らかの結論を導き出すには甚だ心もとないが、明治期から昭和初期にかけての女性のキリスト教への改宗（ミッションスクールと女子生徒の改宗）、そういった女性と外交官との婚姻、戦間期欧州における外交官とカトリック高位聖職者との交友といった点が、少ない事例の中でも重複して浮かび上がってきていることは指摘できる。これらの点がどれほど一般的だったかを精査した上で、第二次世界大戦前夜における外交官のキリスト教への改宗とその職務への影響について、検討する余地はあると考える。

5. まとめにかえて——コルベ神父の内的変化の徴候

川下勝は、コルベ神父の書簡を主要な資料として用いて著した伝記の中で、「日本に行くまでのコルベ神父は、カトリック以外のキリスト教や他宗教の人々に対して、かれらと議論し、理論的にカトリック教会の正統性を認めさせようとする努力をしている。日本での6年

間の滞在の後、神父は議論して、理論的に相手を納得させるよりも、対話という方法をとっている。日本滞在中、プロテスタントの牧師や仏教の僧侶などと親しく交わり、かれらの中に優れた宗教性を発見したのであろう。このような態度は、ナチスの収容所で一緒だったイスラム教徒との間でも見られる」とし⁵、そのイスラム教徒の証言を取り上げている⁶。

書簡や日記などのエゴ・ドキュメントと、活字メディアとでは性質が異なるのは言うまでもないが、川下の指摘するような変化が『無原罪の聖母の騎士』の記述の中で明確に確認できるかと言えば、そうではない。しかし、6年間の『無原罪の聖母の騎士』における記述を通じて、相手の言葉に耳を傾けながら、注意深くカトリックとの共通点・類似点を探す態度が生じている点は指摘できる。(単純に日本語の上達に依るところも大きいにせよ、)日本への到着間もない頃のコルベ神父であれば、精霊流しや祖先の霊魂について市井の人々が語った言葉や、河合公使が吐露した宗教観を丁寧に雑誌の紙面に転写することはしなかったのではないか。そういった姿勢が、最終的に日本人の改宗を促すためのプロセスに過ぎなかったとしても、コルベ神父の他者との対話の質が変化していることは指摘できる。

注

- 1 ポーランドのニェボカラヌフ修道院の院長に就任するため帰国したコルベ神父は、1939年、ドイツのポーランド侵攻に伴い、ナチスの思想・イデオロギーに反する活動を行う「思想犯」としての扱いを受けるようになる。開戦直後に逮捕され、3ヶ月間収容所に送られたが、釈放後も変わらぬ活動を続けたことから、1941年2月、アウシュヴィッツ強制収容所に送られた。7月、コルベ神父が収容されていた獄舎から脱走者が出たことから、無作為に選ばれた10人の囚人が見せしめのため、「餓死牢」に入れられ処刑されることとなったが、選ばれた1人の囚人が「妻子を残して行くのが無念だ」と涙を流すのを見て、コルベ神父は、身代わりとして自らが処刑されることを名乗り出た。この「身代わりの愛」と呼ばれる行いにより、戦後、コルベ神父はカトリック教会の崇敬の対象となり、1971年に福者に、1982年には聖人に列せられている。
- 2 ポーランドの著名人の墓地画像を収集したサイト“Moje Cmentarze”より転載。河合公使の墓石画像へのリンクは以下(廣田弘毅揮毫の墓碑銘の写真もあわせて掲載されている)。
[<http://mojecmentarze.blogspot.com/2012/06/hiroyuki-kawai.html>]
- 3 E. パワシュ=ルトコフスカ & A.T. ロメル『日本・ポーランド関係史』彩流社、2009年、143頁。
- 4 前掲書、144頁。
- 5 川下勝『コルベ』清水書院、1993年、76～77頁
- 6 前掲書、136～137頁

※『無原罪の聖母の騎士』からの出典(発行年月)はすべて本文中に記載した。また、同誌からの引用については原文ママとしたが、縦書きの原文を横書きで表記する都合上、ごく一部(繰り返し記号など)変更を加えた箇所がある。